

Title	現代ドイツ社会学の思考状況に関するノート：その人間中心主義的志向をめぐって
Sub Title	A note on the "Speculative-Constellation" of German sociology of today
Author	石坂, 巖
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.9 (1955. 9) ,p.686(36)- 696(46)
JaLC DOI	10.14991/001.19550901-0036
Abstract	
Notes	資料
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19550901-0036

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノート

—その人間中心主義的志向をめぐつて—

石 坂 巖

「西方社會學の自然主義的、心理主義的であるに對し、ドイツ社會學の本質は精神論的であり、その方法は理解である。」Sombart, *Soziologie* 1923, S. 9-14.

- 一、「人間學的社會學會議」
- 二、ウェーバーとデイルタイ
- 三、認識批判としてのイデオロギー
- 四、近代經濟理論と知識社會學
- 五、社會學的人格概念

本稿は元來、第二次大戦の「恐るべき崩壊」(L. v. Wiese)後のドイツ社會學界を精力的に主導しつつある雑誌「Kölner Zeitschrift für Soziologie」を入手し得なかつたが故にひとまず斷念された「ドイツ社會學の精神的狀況」の研究のために讀み集められたいくつかの論文により構成されている。それ故ドイツ社會學の戦後の

再建、新發足、展開の歩みを跡づけることにより、ドイツ社會學史における現代のその位置、意義を考察する意圖に代つて、方法、對象、課題に對する彼らの態度の特徴を窺ひ且つそのりんかくを描くことに限定されている。戦後日本における社會學的視向のアメリカ的傾斜、そしてドイツ社會學紹介の殆ど皆無なることを思えばかかるノートの提供も許されるであらう。

尙ここにいうドイツ社會學とはいわゆる西獨のそれであること、参考論文の本文中での引用を一々指示することは煩雜に耐えぬことと、紙面の節約のため末尾に一括列記することにより代えられていることを附記しておく。

一、「人間學的社會學會議」

人間こそこの世の意味である (L. v. Wiese, 閉會の言葉)

現代ドイツ社會學の問題狀況を象徴するかのよう一九四九年九月二十七日、八日 Mainz 大學において L. v. Wiese 議長の下にこの學會は開かれた。「人間についての關連諸科學促進のための會

議」という長たらしい副題をもつたこの會議の席上には人種學者が哲學者と、社會學者と神學者とが肩を並べ法學者の隣に心理學者が腰を下ろした。とりわけ經濟學者と社會學者が多かつたといえ、ある一部門の學者が絶對多數を占めたとはいえなかつた。出席者のこの多彩な顔ぶれにもまして會議のテーマ(1)「人格と集團」(Person und Kollektivum) (2)「十九世紀の巨大な人口増加の社會的、文化的歸結」(Die sozialen und kulturellen Folgen der großen Bevölkerungsvermehrung des 19. Jahrhunderts.) は彼らの問題意識の具象化であつた。今このテーマをめぐつて社會學、哲學、心理學、精神病理學、經濟學、法律學、人種學、教育學、神學の九専門學問の代表者により行われた報告を詳述することはできぬが、第一に人間人格の集團的實存としての社會形成體との關連において人間の研究を各専門視角からとりあげることに、第二に同様に各専門視角からの人口増大の人間への能力、資質、知性への影響の檢討、即ち L. v. Wiese の開會の言葉でいえば「人間なるものの認識」という綜合的課題に仕えるべきことが、とりわけドイツ社會諸科學に向けて布告されたのである。

その成果はともあれ會議が社會學者 L. v. Wiese により提唱され且つリードされたという事實は右の布告と共にドイツ社會學の積極的な意欲と關心の所在を示すものであらう。このような意欲が又社會學内部において理論的な主張として形をとることも自明であらう。Hans Winkmann は L. v. Wiese 生誕七十五年紀念論文集中で Harriet Hoffmann が社會科學的研究方法としての L. v. Wiese の關係理論の基礎付けを行つたのに呼應して、同論文集中に

現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノート

において體系的社會學(關係理論を指す)が自身の問題領域を確定し且つ全體の觀照を提供することにより社會生活の理論に方法的基礎を提供したことをその功績として稱え、他の社會諸科學が之により彼ら自身の思惟遂行の廣汎な深化に新な衝撃を受け、新しい認識のための路を知つたという限りで大きな影響を受けたことを主張し、經濟學、教育學、社會政策、社會倫理學、別して社會心理學、經營社會學、經營社會政策へ及ぼした關係理論の基本範疇たる「社會過程」の態度と狀況の產物に概念の影響、意義を夫々の分野に互つて跡づけた。L. v. Wiese 自身ドイツ社會學會の再建に際し、Max Weber 時代の古いプログラム(價值判斷排除の要求、客觀的認識への限定)が秘教的に把握された科學性のあるりの強調の故に純理論の獨立化を阻害したこと(例えば第一、第二回社會學大會(一九一〇年、一九二二年)では議論は論者が現實上、推定上抱く規範への追求にかり立てられ、個人的關心からその内容がいかに自由に自由であるかその程度の測定に終始し内容の問題が置き去られたこと、又現代ドイツ民族のもつ大きな窮迫に較べればより幸福な時代における產物であることから最早そのプログラムは「古くさく」みえ維持しがたいたし、新たなドイツ社會學會の規約第一章に「學會は理論社會學並びに社會政策を含めての應用社會學の諸問題に専心する」べき規定の明示を要求し之を決定せしめた。

以上やや外面的な諸事情の一瞥により現代ドイツ社會學の人間中心主義的志向と積極的な意欲を示したが、ではかかる「まなざし」、「意欲」が彼ら自身營む社會學の學問的活動においていかに展開されているか、若干の論點について以下このことを考察してみたい。

三七 (六八七)

二、ウェーバーとディルタイ

「抽象的、實體の本質のあの灰色の亡霊が追拂われた跡に人間が残る」……Dilthey
「行為の背後に人間が立つ」……M. Weber

恐るべき崩壊からほぼ十年経た一九五四年十月かつてのマックス・ウェーバーの町 Heidelberg に開かれた第十二回ドイツ社會學會並びに第三回人間學的社會學會議の席上のべられた L. v. Wiesse の開會の挨拶はこうであつた。二十年前には超經驗的思辨の支配の故に事實の蒐集が強調されたが、現在ではアメリカのやり方によつて Tönnies, M. Weber, A. Weber, Sombart, Simmel, L. v. Stein, A. Schöffel による自己の傳統を忘るべきでないこと、そして自立的理念の價値を高く保持し概念的なるものを無視することなき研究者としてとどまるべきであり、集團的活動に習やかされることなく個人的研究活動を押し進めることを強調し、何よりも何が傳統であるかを顧みることを要求したのである。然し彼が「アメリカ的やり方」の前での祖國の社會學的傳統の忘却を懸念するかなり以前に Renate Wanstat がその論文「Die hermeneutische Methode in der soziologischen Forschung」(1949) においてその「傳統」を現代社會學的思考の基礎として確認しつつあつた。Wanstat が確認したその傳統とは「社會の外面的組織や計畫ではなく社會的態度と行動のうちに現わされるものすべての發展と展開」とをその對象としてもち「同時にだが又人間の生活遂行を規定し内側から作用する精神的諸動機を、その結果との關連において理

解し解釋する」という視角をもつ「文化社會學」と之に固有且つ適合的な方法としての「理解」解釋的方法であり、「吾々は人間を眼の前に置いているものであること、吾々自身又人間であることを常に自覺していなければならぬ」という「態度」であつた。そしてこの傳統がとりわけディルタイ(解釋學)とマックス・ウェーバー(理解社會學)に根差すものであることを、ギリシヤ語 Hermeneus に由来する Hermeneutik (解釋學) が神話學的源泉に發しキリスト教、ストア哲學へ流入しそしてルネサンスのプロテスタント教會から彼等を護る「黄金の鍵」として迎えられ、ついで啓蒙の自然科學的思考に支配された後 Schleiermacher, Droysen に至つて初めてドイツの傳統としての姿を現わしてきたその(解釋的方法の)歴史を顧みつつ位置づけた。彼は更に「Das sozialwissenschaftliche Verstehen bei Dilthey und Max Weber」(1950) なる論文において右のディルタイとマックス・ウェーバー相互の親近性を、彼等に對する自身の世代の親近感により彩りつつ詳細に跡づけた。從來マックス・ウェーバーを新カント學派と同一地平に置くのが通念であつたが近時のドイツ學界ではディルタイに近づける意見が有力になりつつある(例えばマックス・ウェーバー學問論文集第二版の編者である Johannes Winckelmann も又同一見解を示している)。では哲學者ディルタイに反し哲學者ではなく又たろうともせず法律學者、經濟學者、社會學者として、特殊研究者として、只「専門科學」にのみ仕えんとしたマックス・ウェーバーとディルタイとのつながり、親近性はどこにあるのか。深い現實感覺、社會形成を支える精神的なるものへの姿勢、人間が己れの内部にもつ暗い衝動、

歴史を規定する非合理的契機の洞察、豊かな歴史的思考はいずれも兩者の共有するものではあつたが何ものにもまして、彼らを結びつけるのは「人間中心主義的視向であり恒に人間の人格を研究の中心點においた」ことであり、その結びつき方は「ディルタイが個々の社會科學部門にいわば遠くから示した課題と目標をウェーバーが引つぎ、自己の特殊領域について徹底的に考えぬいた」というものである。問題點に即していえば「ディルタイ以前には文獻學的考察の領域にのみあつたように見える『理解の技術』をウェーバーが社會學の領域に移し、この領域に新たな道具を創造し爾來社會的現實の探求に新たな可能性と路を開いた」ということであつた。

その始まりにおいて數學的自然科學的觀察様式並びにロマン主義的思辨的思考への闘いを起點とし、民族精神、民族心、有機體等の概念を神秘的としてその實體化を拒否し、人間的なるもの、經驗的なるものの尊重を主眼とし更に歴史學派が現實の深い感情にひたつて抽象化の世界から逃避したことを責め、他方抽象化した部分内容を生きた全體に關係づけることを無視した點に抽象派の根本誤謬を認めつつ、歴史的現實をそのものからみること主張し續けたディルタイの課題は「かかる所與のものの地盤の上で歴史的世界の一般の妥當知識はいかにして可能か」という問題解決の爲の方法と武器を發見することであつた。その發見はあまりに幅広い關心の故に果され得なかつたが個別多様性を概念的に整序するための比較的處理方式は「理解」の自己目的ではあるが、多様性を理解しつつ且つ比較するにより諸々の作用が析出され、この作用連關の考察により規則性が明白になりそこに豫測的知識の成立が可能となる點に「理

現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノート

解」の論理的機能認め、更にそこに行われる概念構成は共通なるものを個々の事例からとり出す單なる一般化ではなくしてその概念的產物は「型」を現わすものであること、そして「現象の多様性は……そこでその仕事に完全に現實化されるという理想的な場合を形成する中心點をめぐつてまとめられる」ことを注意している。認識論、論理學、方法論の關連の下にとりあげロマン主義的恣意と不可知論的主觀性の絶えざる崩壊に對し歴史の確實性をつくり出すというこの解釋學の原理的課題が、マックス・ウェーバーにより、理想型的概念構成、評價と價值關係の又評價と價值解釋の峻別、更に價值解釋は意味ある態度決定の準備的作業という意味で價值に關係づけられ、更にそこから可能な未來の狀況從つて態度決定の測定が成立し得ること、このようにして理想型概念構成が客觀的可能性と適合的因果という論理裝置を伴いつつ人間の態度様式(社會的行爲)の妥當な意味把握解釋に近づく手段とされつつ解決の歩を進めたことはあまりにも周知であるだろう。そしてこの理想型的概念構成の概念產物は認識「手段」であり歴史の生成と共にうつろうという動態的性格の故に「あの抽象的實體の本質者の灰色の織物はひき裂かれて人間(ディルタイ)が吾々の認識努力の正面舞臺に登場し、且つ又觀察者たる吾々自身再びその舞臺での演技者でもあるという事によつて理解」解釋の方法は固有且つ適合的考察様式なのである。ディルタイ流に言えば生を生そのものから把えるのである。ディルタイはマックス・ウェーバーをつなぐこのようなドイツ的「傳統」を R. Wanstat は確認しつつ歴史的、社會的本質として人間はその全き人格性において社會科學的研究のすべての努力の

交點にあること、その相互に對する態度、絶えず變轉する諸制度、形成體、その生成、成立に共同する彼の行爲が自らの認識對象であることを改めて確立した。

三、認識批判としてのイデオロギ

—Der homo Vitalis と Der homo Intellectualis
(Theodor Geiger)

すぐれて知識社會學的概念である「價值からの自由」(Wertfreiheit)はマックス・ウェーバー自身において理解社會學に結實するに至つたが、他方又「イデオロギ」概念へ高められ知識社會學の基本概念として二十年代後半から三十年代にかけてドイツ社會學界を根柢から揺り動かすことになつた。そこでは人々は最早夫々の論者が抱くであろう理念追求の「狩人」たるを止め「敵か味方か」をきめつけあう戦士となつて對峙した。この「異常な闘争状況」(E. Tuchtfeldt)こそ現代ドイツ社會學の直接的傳統であることは論ずるまでもない。この異常な傳統は、先にあげた戦前のドイツ社會學會創成期を支配したマックス・ウェーバーのプログラムがより幸福な時代の産物として今や「古くさくみえる」——L. v. Wiese——という現代ドイツ社會學界の精神的雰囲気下では「汎イデオロギ主義」(Pan-ideologismus)の一面性への警戒として理論的に自省されつつある。「思维が存在に抱束されている」というマンハイムの汎イデオロギ的命題は彼の意圖せざる結果として非合理主義に路をあげ——丁度 Pareto の「殘基」(Residuen)「派生」(Derivationen)という知識社會學の理論がイタリヤ・ファンズ

ムに利用されたように——「異常な闘争状況」が頂點に達したナチス支配の一九三三年、從來の幹部 Sonbat, L. v. Wiese 等に代つて社會學會の指導的地位についた Hans Freyer において「まさに認識様式の社會被抱束性」は一定の存在局面を特に純粹に又特に深く認識するチャンスの意味する……社會的に何ものかたろうとするもののみが社會學的に何ものかをみる」(H. Freyer: Soziologie als Wirklichkeit, 1930 S. 113 u. S. 305……T. Geiger 論文より引用)として「主觀性の國民社會主義的崇拜」(Geiger)を出現せしめたが、この Freyer でさえ、今では「價值からの自由」、「理想型的概念構成」の熱心な主張者に轉じている(後記論文参照)。さて右の理論的反省は先ず第一に敵對する攻撃の武器として手あかにまみれ色褪せてしまつた「イデオロギ」概念の歴史的、論理的反省のうちに概念内容の妥當領域確定へと向つた。M. Horkheimer の「Ideologie und Wertgebung」(1951)と Egon Tuchtfeldt の「Zur heutigen Problemstellung der Wissenssoziologie」(1951)はこのようなものであるが、前者は佛大革命期の啓蒙派の Ideologen に始まりドイツのマルクス・エンゲルスの唯物論を経てドイツ社會學の「イデオロギ」概念に至るその歴史を顧みつつそれのもつ相對主義的性格、精神の感覺、本能、社會經濟條件への從屬化から、世界は世界以外に標識を必要としないというスピノザの命題即ち明確な理念の把握と滲透する現實認識のうちに脱しようとする主意主義的性格とその故の論理的分析の未熟さの爲に、後者は同じようにこの概念の歴史的起源を考察してはいるが今すぐあとにふれる Geiger 論文に基本的に立脚するとみられるが故に

ここに立ちいる事を避けたいと思う。

一見自明にみえるが故に立ちいつた分析なしに使用される傾きのある「價值判斷」概念の論理構造をスウェーデンの哲學者 A. Hägerström(1939 歿)の「價值判斷發生」に關する理論に依りつつ分析した T. Geiger の論文「Kritische Bemerkung zum Begriff der Ideologie」(1949)はその明晰性、問題性において恐らく戦後におけるこの方面の論文中出色のものの一つであろう。彼の根本主張はイデオロギ概念の妥當領域を理論批判にのみ限定し理論中に混入される理論外の契機を批判・摘發する概念としての機能を與える事により汎イデオロギ主義の危険を克服しようとする點にある。そしてこの主張を推進せしめる論理的軸心は「價值判斷があらゆる眞の理論的内容なき純粹のイデオロギ」であること、及び「すべて精神活動なるものは諸々の個人のそれであるが故にそれを超個人的主體に歸屬させんとする事は無意味であり神話である」との二つのテーゼにより組立てられている。本來思考の正・不正、眞・偽、正・惡を判別する客觀的法延の存在するのは、現實認識の局面にのみ存するので、その形成が各自の生活體驗の如何に依存するような主觀的、實存的な思考面には存しない。もし後者にあるとすればそこでは「正しき階級意識からナチスの正しき種族・民族意識」に至るまでさまざまな審判者が登場するであろう。従つてそこにおいて「勞働者が悪しきイデオロギをもっている」が如き言い方はナンセンスであろう。何となればそこではすべては正しいイデオロギであり惡しきそれであり得ようから。然るに「企業者利潤は經濟的進歩の必須條件である」という主張を企業者イデオロギ

現代ドイツ社會學の思考状況に關するノート

と呼ぶなら客觀的現實についてのこの認識の現實との一致・不一致、眞・偽についてその虚偽性を争い得るであろう。この客觀的現實の認識上の立言を彼は理論的命題と呼び虚偽的思考としてのイデオロギ概念をそこに限定し、上記の理由から汎イデオロギ主義の誤りを認識領域を越えたすべての精神活動にまでその範圍を擴大した點に認め、ここに一切の混亂の原因をみた。しかし理論局面にのみ虚偽の思考としてのイデオロギは成立し得るが故にこの概念は認識批判の概念として機能し得る。したがつてイデオロギの本質は「理論外の契機」が思考中にしひびこんでいる點にあるとされる。然るにすべての思考は個々の人間のそれである以上そのような契機としての社會構造の思考中への突出というものはあり得ずむしろ心的態度(Mentalität)の問題である。さて Hägerström によれば價值表象は客體への評價する者の感情關係が空間的時間的に與えられた客體の特性中へ解釋し直され客觀化される事により生ずる。然るに空間的・時間的現實體として價值なるものは存しないが故に、それは客體への諸々の個人の感情連關にすぎないが故に、價值主張は理論的立言ではあり得ない。對象に對してはそれは眞・偽、正・不正のらち外にあり「無」である。以上の Hägerström の價值判斷發生理論から最後の點に反對しつつ自身の價值判斷構造論が展開される。例えば動物虐待について某氏が

- 1、嫌惡感を覚える……第一次的評價行爲
- 2、「ベツあの虐待者め」とはき出した場合……吐露的評價の表明
- 3、「私は動物虐待を嫌惡する」と言つた場合……反省的評價

4. 「動物虐待は嫌悪さるものである」……價值判斷

(1)——(3)が虐待に對する彼の感情關係について即ち自身について言われているのに反し(4)は虐待自體について「嫌悪」という特性が内在するものとして置かれているのであり理論的敘述を志向しているのである。かかる感情關係の客觀化・價值判斷は理論外契機の思考への侵入IIイデオロギーとして批判を免れない。かくイデオロギーは第一次的感情關係の客觀化・理論化に依る眞ならざる、みせかけの理論として反理論的現象であり、このように感情現象に感染された理論である點にこの言葉がもつ一種の蔑視感が生ずる。最後にかかるイデオロギー化の危険を、感情禁慾と自己コントロール、自身の潛勢的なイデオロギー源泉の自省により免かれんとしている。この點ではウェーバー・マンハイムの傳統をうけついでいるがこの危険は、政治家、學者としてのマックス・ウェーバーの苦闘に象徴されているように、Der homo Vitalis(生活者)・Der homo Intellectualis(知識者)という二重容貌をもつ吾々人間に一切をひきつけそこから思考を始める時、のつびきならぬ課題として照らし出されるものである。

四、近代經濟理論と知識社會學

「數學的編細工でなく人間の行爲、行動が問題なのだ」——
G. Eismann

以上にみたような幅広い關心、活潑な意欲は當然思考の分野を擴大するに至る。例えばかつて第六回社會學會大會(1938)に哲學者

として出席した Rothacker は、その大會での Sombart の社會科學の方法としての「理解」についての報告に對し道德的諸現象のみ「理解的」方法は適用されることを主張して只一人この方法の普遍化に反對したが(Verhandlungen des sechsten Deutschen Soziologentages, 1929, S. 235—238)、『この彼が今「Bausteine zur Kultursociologie」(1949)によつてこの「理解」を方法としてもつ文化社會學の礎石として利用さるべき社會科學、美術、哲學、文學上の豊富な文獻を呈示しているのを見るとドイツ精神生活史の屈折に手ざわりする思いにうたれるが、ここでは社會學に最も密接に關連する經濟學との關係にふれてみたい。

現在旺盛な學問的生産力を社會學、社會哲學の分野で示しつつある Ziegenfuss は「Wirtschaftssoziologie und Wirtschaftstheorie」(1950)によつて「經濟の理論はその對象を自然科學のメカニズムのように自足的、自立的機能連關として因果的に構成する」という、かの宿命的誤りから經濟理論を護ることは社會學の證明を要する課題となしている。この「宿命的誤り」からの經濟理論の解放に H. Suttan は「Gesellschaftliche Strukturwandlungen und Nationalökonomische Theorie」(1953)なる論文におつて手をそめた。續いて之に刺戟を受け G. Eismann は「Bemerkung über das Verhältnis zwischen ökonomischer Theorie und sozio-ökonomischer Struktur」(1954)を發表した。今この兩論文における問題點をまとめればこうである。

先ず Suttan がこの「解放」のプログラムを公布し、Eismann がそのモノグラフへの路を開けた。プログラムは(1)經濟理論に「君

がそのように考えるのは何故であるか」即ち經濟理論の活動様式(Art. u. Weise)、把握様式を従つてその内實ではなく「理論の営み方」を設問すること、(2)それと社會構造、その轉換との關係をみること、(3)そのために Mannheim であれ M. Scheler のであれ知識社會學の諸概念を使用することとして規定された。このプログラムはすでに無意識的に適用されていた、且つ又決して特殊ドイツ的ならざる右の設問様式を——Sombart, Eucken, Keynes, Myrdal やアメリカの制度學者達にすでにみられた——より自覺的にとりあげ、より鋭い武器(知識社會學)をそれに添えたものなのである。この綱領の實踐は何より現代に支配的な「近代理論」に向けられその結果「近代理論」の活動様式のよつて立つ地盤はそれ以前の社會構造に依據し、その思考様式(Denkstil)は内容的には既に過去のものとなつた思考立場(Denkstandort)に屬することが摘發されたのである。知識社會學的分析によれば「近代理論」の営み方は

- (1) 「模型における思考」
- (2) 「理論の道具的性格」
- (3) 「均衡定理と弾力性概念」

に示されている。このうち(1)の「模型論」は古典派のよつた標語「Laissez faire, laissez passer, le monde va de lui-même……」の後文「世界は自ずと動く」という豫定調和信仰に基づくものでありかの理論論の「見えざる手」をもつ、M. Scheler 的に言へば「Ingenieur-und Maschinist」(技師—機械師)の神の代りに經濟理論家が神の「座」に位置し人間の經濟と社會とを含めて世

界という機械が「自ずと廻轉する」よう設計したもので、まさに初期自由主義の「亞神學的思考立場」なのである。古典派の「自然法則」概念は現代の「模型」概念としてその亞神學的立場を薄めたのでありあの見えざる手の豫定調和の理論は自由貿易論、政治的自由主義、連帶心理、對外政策上の balance of power 等に廣汎な思考立場の構造的同一性を示したが現代ではこの同一性を「均衡定理」に出現せしめ、この定理の動態的純化たる「弾力性」概念をもつに至つた。道具的性格の哲學的地盤は新カント派やプラグマティズムにあるがともあれ右のようにその思考立場、思考様式の十八世紀中葉型であるのに、あの理論論の現實地盤たる社會構造のその後の質的變化は言うまでもないとして近代理論にその活動様式の知識社會學的不適合性を刻印し、誰が(質的……社會的勢力)、どれほどの多數の人(量的)がある一定の理論を擔い代表するかということこそ重要であると主張して理論のもつイデオロギー性の問題を指摘した。

かかる近代理論の知識社會學的不適合性を豊富な文獻を示しつつよりラディカルに示したのが Eismann で例えば「完全均衡」「完全競争」という均衡定理は社會の調和——所與の社會經濟の枠内にさまざまな状態にある社會學集團の利害の調和を前提とし、かくてその理論體系は、社會的調和の現存することの宣言に關して一定の社會學的集團のもつ利益狀況に顯著に對應するもので實踐的要求と合致しているものだと言いきつてゐる。この「現實不適合性」は可能な限りの全體的數學化によつては調整されずしてむしろ人間の行爲、行動が問題なのだという事實を忘るべきでないこと、そして特に人間行動に密接に結びついた局面を對象とする景氣變動論、

財政學、貨幣論、金融論はもし右の事實を忘却し、各種の人間行動を興件Aとして一括してしまうなら「真空中の理論」に墮してしまふこと、このような點では、近代理論の父達 Menger, Marshall や、その追隨者に反して、Keynes は右の問題點をはつきり看取していたことを跡づけ注意している。——例えば Keynes の企業者の期待、流動性選好、消費性向等の心理的概念はもとと人間行動Ⅱ社會學的局面を表示するものであると。

經濟理論の理論的墮落、獨斷的ニートピアからの解放の前提は「現實への姿勢様式や現實からのその構成部分の選擇」がすでに觀察する研究者の Persona (彼の知識社會學的立場を含めて) のうちにあるを承認する事だと知識社會學は教える。何故なら「吾々は理論に對しているのではなく狀況に立ち向つてゐる」(Sultan) のであるが故に。

五、社會學的人格概念

「産業的社會の巨大組織は人間を機能に還元し人間の生命性を即物的效果に代える」——Hans Freyer

注意深い讀者は既に、ドイツ社會學の現代的關心の幅廣さと活潑さの軸心として「人間——その人格」概念が人間行動、態度分析への要求を伴いつつ中央に位置していることに氣づかれたであらう。多方面な關心は社會構成體の基礎單位としての人間内面への深々とした意識と對應しているのである。その點にこそ先にあげた第一回人間學的社會學會議の第一テーマ「Person und Kollektivum」の知識社會學的意義が存する。従つてここに人格概念の社會學的意

味と意義とに少しく觸れておく義務がある。この點で私達は社會學者、社會哲學者 Nissenius に最も適切な規定者をみ出す。彼をして語らしめればそれは次の三條件より成る。

- (1) 私達がある中にあるを義務づける社會的生活連關内で價值的に積極的だという意味で自發的に活潑に在るという態度……本質的概念
- (2) それ故超個人的目的が承認されていること
- (3) この目的の實現化に手助けになるときにのみ個人の行爲は社會的意味をもち之によつて業績 (Leistung) という性格が形成されること

この三つのモメントにより構成される社會學的人格概念はそれ故切り離され孤立化された「個人」(Individuum) の概念と區別されるものである。従つて私達は冒頭にあげた學會で社會學部門を代表した報告者 W. E. Mühlmann が「個人と個人の集まり」(Summe) に代つて「人格と社會形成體」という概念裝置による研究對象の構成を主張した所以を十分理解出来る。

ではこのように社會的生活連關内部における積極的態度としての人格概念がかほどにまで強調され、重要な位置を有している意義を足早に考察してこの「ノート」を閉じたい。

近代資本主義社會が産んだ現代社會經濟機構のメカニズムはその巨大裝置のなかに人間を否應なく(まさに義務づける)巻き込んで機能化し、反射と循環の流れのなかに人間の自己意識、自己價值感情を喪失せしめ、企業、工場、官廳等總じて社會形成體構成の目的、仕方についてのエトスを剝奪する。かかる特質の最も端的な時代的

表現は東西世界の對立でもあらうが、右の狀況のもつ悲劇性はその巨大裝置自體がその内部に新しい社會形成の生命力を創出する力を有しない——現代産業社會のもつこの問題性を H. Freyer は「二次的 (sekundär) 組織」のそれとして規定している——という事情により倍加される。社會學的「人格」概念の強い主張は、かつてマックス・ウェーバーが洞察力あるまなざしでみつめていたような——すぐさま脱ぎすてらるべきこの世の假の薄衣が鐵の衣として重々しく吾々に蔽いかぶさつてゐる——問題狀況に直面しての人間の生命性への、社會形成力たるエトスへの吾々人間の「内なる叫び」ではあるまいか。

ここに吾々は現代ドイツ社會學の思考狀況を總括し第一に「人間中心主義的志向」第二に「新理想主義的志向」という二つの言葉を裏面に彫りつけたこの「ノート」を閉じる。

附記 (この「ノート」の作成には慶應義塾學事振興資金の援助を受けた。)

参照論文

- L. v. Wiese, Die Deutsche Gesellschaft für Soziologie. Schmollers Jahrb. 69 Jahrg. 1949, 2 Heft S. 101—107.
- K. G. Specht, Der Zehnte Deutsche Soziologentag in Deltmold. Schmollers Jahrb. 69 Jahrg. 1949, 1 Halbb. S. 737—742.
- K. G. Specht, Die Anthropologisch-soziologische Konferenz. Schmollers Jahrb. 70 Jahrg. 1950.
- 現代ドイツ社會學の思考狀況に關するノート

1 Heft S. 87—98.

K. G. Specht, Der 12. Deutsche Soziologentag und die 3. Anthropologische-soziologische Konferenz. Schmollers Jahrb. 75 Jahrg. 1955, 1 Heft, S. 87—92.

E. Tuchtfeldt, Zur heutigen Problemstellung der Wissenssoziologie, Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 107 Bd. 1951, S. 723—731.

H. Winkmann, Die Bedeutung der systematischen Soziologie für die Sozialwissenschaften. in: Soziologischen Forschung in unserer Zeit. L. v. Wiese zum 75 Geburtstag 1951, S. 15—24.

H. Hofmann, Die Beziehungslehre als sozialwissenschaftliche Forschungsmethode. ebenda S. 25—40.

R. Wanstrat, Die hermeneutische Methode in der soziologischen Forschung. Schmollers Jahrb. 69. Jahrg. 2 Halbb. 1949, S. 641—659.

R. Wanstrat, Die sozialwissenschaftliche Verstehen bei Dilthey und M. Weber. Schmollers Jahrb. 70 Jahrg. 1950, 1 Halbb. S. 19—44.

T. Geiger, Kritische Bemerkung zum Begriff der Ideo-

79—101.

尙戦後のしばらくの時期の社會科學關係文獻目録としては左記のものが便利である。

Bibliographie der Sozialwissenschaften. herausgegeben von R. Schaefer in; Jahrbuch für Sozialwissenschaft, Bd. 1/1 1950.

logie. in; Gegenwartsproblem der Soziologie, A. Vierkandt zum 80. Geburtstag 1949, S. 140—155.

M. Horkheimer, Ideologie und Wertbeziehung. in; Soziologischen Forschung in unserer Zeit. S. 220—227.

H. Sultan, Gesellschaftliche Strukturwandlungen und nationalökonomische Theorie. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft, 109 Bd. 1953, S. 602—614.

G. Eisermann, Bemerkung über das Verhältnis zwischen ökonomische Theorie und sozio-ökonomische Struktur. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. 110 Bd. S. 458—471.

W. Ziegenfuß, Wirtschaftssoziologie und Wirtschaftstheorien. Schmollers Jahrb. 70 Jahrg. 1950, 1 Halbb. S. 1—18.

H. Freyer, Der Mensch und die gesellschaftliche Ordnung der Gegenwart. Zeitschrift für die gesamte Staatswissenschaft. Bd. 110, 1954, S. 1—12.

E. Rothacker, Bausteine zur Kultursociologie, in; Gegenwartsproblem der Soziologie, 1949, S.

宗門改帳より壬申戸籍へ (二)

——維新期の人口調査とその一例——

速 水 融

について「三田學會雜誌四十六卷七號所收」参照。

- 一、維新期における人口調査
- 二、和歌山藩における人口調査(以上四十七卷十二號)
- 三、紀伊國牟婁郡尾鷲組概観
- 四、幕末維新期尾鷲組人口統計資料の考察
- 五、結言

三、紀伊國牟婁郡尾鷲組概観

紀伊國牟婁郡尾鷲組は、現在の三重縣尾鷲市内に含まれる管下十四ヵ村で構成されていた。中心となる尾鷲は、徳川時代には中井、南、林、堀北の四ヵ浦、及び野地村の五ヵ村から成り、その他早田、九木、行野、大曾根、天満、水地、須賀利の七ヵ浦と、向井、矢濱二ヵ村がある。浦方と村方の區別は既に述べた如く、^(註)漁業を許されるか否かによつて居り、従つて實際に漁村であるか農村であるかの區別とはならない。しかし、尾鷲組十四ヵ村の内十一ヵ村が浦方であつた事は、この地の位置するところを物語っている。

(註) 拙稿「近世における漁村の移住と漁場の利用、支配の關係

宗門改帳より壬申戸籍へ (一)